

末武全女性連会長、南島原市商工会女性部を訪問

雲仙岳の麓に広がる南島原市は、雲仙・普賢岳噴火の被災から20年が経過し、すっかり復興を遂げている。この地を拠点に活動する南島原市商工会女性部は、昨年度の「ふるさと小包グランプリ」で入選を果たした。伊崎美代子部長、吉岡順子前部長、陣川むつ子副部長に、ふるさと小包の開発秘話や部員増強活動、地域貢献への取り組みなどについて末武栄子全女性連会長が話を聞いた。

末武 南島原市商工会女性部は、平成19年度に8つの商工会が合併して誕生

した女性部と伺っております。部員増強運動で優秀な成績をあげられているほか、昨年度の全女性連「ふるさと小包グランプリ」事業では、審査の結果、上位5点として入選されるなど、活発な取り組みをされています。

それでは、まず女性部の概要について教えてください。

伊崎 現在、南島原市商工会女性部では、下は30代から上は80代と年齢・業種ともに幅広く、323名の部員が活動しています。合併を期に「講習会研修会事業部門」「親睦事業部門」「先遣地視察研修事業部門」「地域振興事業部門」の4つの部会により事業計画を

立てて事業を行っています。

吉岡 合併にあたって時間を要したこともあり、女性部も各地区から設立委員を選出して会議や準備を重ねてきました。もともと同じブロックで活動してきたこともあって、影響は少なかつたと思いますし、現在も不都合はあまり感じていません。

陣川 合併前は40名ほどだった部員が、合併後300名を超える大人数になりました。部員が大勢いるからこそ



末武全女性連会長

できるようになったことでもあるので、よかったと感じています。支部ごとの特色や、色々な事業の運営の仕方などを知るいい機会にもなりました。



ふるさと小包「うまかもん」

末武 合併して規模が大きくなると、時間が経つにつれて部員の帰属意識が薄れ、離れていかなないものかと思いがすが、その辺についてはいかがですか。

伊崎 8支部から代表2名ずつが役員となり、議題を各支部へ持ち帰り、情報を共有するようにしています。また、ミニバレーやボウリングなどの交流・親睦事業も大切だと思います。

陣川 確かに私たち役員は、よかったと感じていますが、部員一人ひとりの声や意見に耳を傾けていく必要はありますよね。

末武 まずは、みなさんから「合併しよかったです」というお話を伺えて安心しました。次に「ふるさと小包グランプリ」事業への応募のきっかけや取り組みについて教えてください。

「ふるさと小包事業」を通して、女性部の特性を活かす

伊崎 1年目は、「私たちにはできない」で終わっていたのですが、翌年度、県連での会議に出席した際に、隣の雲仙市商工会女性部が取り組んだものを見て「私たちもやってみようか」ということになりました。

陣川 地域振興事業部会を中心に、各支部から商品を持ち寄って集まりました。「女性が喜ぶものがいい」「地元で有名なものは何だろう」「よそにはない、こういうものもあるよね」などと検討を重ねていきました。また、メンバーの中に写真屋さんもいらつしたので、かごを使って商品を並べたり、布を敷いたり、写真の撮り方にも工夫を凝らしました。

伊崎 さまざまな業種の集まりである女性部の特性を活かすことができました。全国大会（岩手大会）で展示されたときも、集まっている人たちが多かったので「私たちが一番かも」なんて話をしていましたよ！

末武 入選後の活動はどうですか。

伊崎 小包の名称「うまかもん」というネーミングを活用したのぼり旗を作りました。各地区のイベントや祭り開催時などに「うまかもん市」という名

のもと、各町の特産品を販売するなど継続的に取り組んでいます。

陣川 どうやったら全国に売れるようになるのかその仕組みを知りたいです。

末武 確かに女性部がPRして販売していくのは簡単なことではないと思います。女性を買う贈り物の値段としては、4500円はちょっと高いかもしれないですね。

陣川 品数をいくつか減らしてでも、値段を安くするといいいのかもしれないですね。

末武 ネット販売をするなど、ぜひ今後も継続して頑張ってください。全女性連としても、応援できる仕組みを検討していきたいと思います。そのほかに、特に力を入れている活動はありますか。

陣川 エコ活動として「古紙回収事業」に取り組んでいます。市とタイアップし、各家庭から出る古新聞や段ボールを商工会へ持ち込んでもらい、引き取る仕組みです。プールした古紙を回収業者へ渡すと、市が1キロあたり5円の補助金を出してくれます。年間10万円弱の収入となるので、これを女性部の事業運営費に充てています。

郷土料理「ろくべえ」を復活

末武 支部ごとで特色ある活動に取り

組んでいる地域はありますか？

伊崎 合併前から取り組んでいた深江支部の「ろくべえ」部会の活動があります。

吉岡 「ろくべえ」とは、200年前に噴火した雲仙普賢岳の被害を受けた際に、六兵衛さんという方が考案したという、さつまいもの粉で作った黒いうどん(そば)のような郷土料理です。平成3年の噴火・火砕流の災害を機に「心ひとつ」にして深江の女性部が復活させようと取り組みを始めました。

毎年11月から4月までの毎月6日を「ろくべえの日」として、商工会館内に整備した専用の厨房に早朝6時頃から集まって手づくりし、その後販売をしています。



左から：吉岡前部長、陣川副部長、伊崎部長



郷土料理「ろくべえ」

伊崎 さつまいも独特の風味がするんですよ。この「ろくべえ」部会の活動が、部員増強に

も一役かっています。1つの事業所から、親子2世代で活動する方が増えました。早朝はお母さん、昼間はお嫁さんというように、家族の中でも役割分担をしながら活動に参加されています。

陣川 世代交代を今後どうすればいいかということは、どの支部でも課題だと思っています。先ほど親子2代という話もありましたが、若い世代だからこそできることもあると思うので、そのつながりづくりになる事業やイベントを企画して、仲間を増やしていけるようにと考えているところです。

いろいろな方々と出会えたのが女性部活動を通じてのメリット

末武 女性部に加入して活動しているからには、何かメリットを感じてほしいと私も常日頃から思っています。

伊崎 やはり、いろいろな方々と出会えたのが一番のメリットだと思います。さまざまな業種の方々と知り合え、情報交換ができることは何よりあります。

たいです。

陣川 初めて全国大会に参加した際には、非常に感銘を受けました。あのよう盛大な大会の映像を、ぜひ多くの方々に見ていただくことはできないでしょうか。

末武 全国大会のDVDは、各県連に送られていますので、活用していただきたいと思っています。全国大会に参加できる人数は限られていますが、各プロツクの大会には、より多くの方に参加していただきたいと思っています。主張発表を見聞きすると感動すると思いますし、その感動が女性部活動の原動力にもつながっていくのではないのでしょうか。役員や一部の方だけしか参加しないのでは、もったいないことだと感じています。

最後に、今後どのような活動に取り組んでいきたいか教えてください。

伊崎 農商工連携について着目していて、海と畑と山、自然に恵まれた環境を活かしてみんなで勉強していこうと考えているところです。2月には、専門家の先生をお招きしてセミナーを開催します。

末武 前向きな皆さんの今後の活動に期待しています。同じ女性部員として、私も頑張っていこうと思います。